月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.33

もはや別人!? 変装自慢!
みんな集まれ! ファルコム学園
新久保だいすけ

啄木鳥しんき イラストメッセージ

ティオのファルコムラジオ めんどくさいです…でもがんばりますの舞台裏

ファルコムjdkバンド ドラマー・オカジの
人生半キャラずらし

jdkバンド ボーカル・コテカナの
コテ放題♥

リィンたちを助けてくれた
遊撃士トヴァルとは?

ドラマCD
零の軌跡プレストーリー ―審判の指環―
シナリオ一挙掲載!





FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

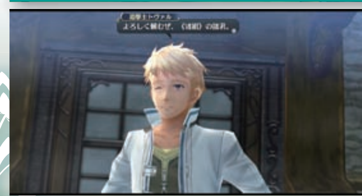
リィンたちを助けたあの遊撃士は実は……!?

ドラマCD
零の軌跡 プレストーリー
ー審判の指環ー



『閃の軌跡』でⅦ組の担任・サラ教官の要請を受け、各地で影ながらリィンたちをサポートしていた遊撃士・トヴァル。以前、弊誌でも紹介したが、このキャラが初めて登場したのは、啄木鳥しんき先生が描くコミックだった。今回は、そのコミックをドラマ化した時のシナリオを一挙掲載！　これを読めば彼がどんな人物かもわかるはず！

■商品情報
『ドラマ CD 零の軌跡 プレストーリー
ー審判の指環ー』発売中
発売元：キャラアニ
価格：3,150 円（税込）





トヴァルのもうひとつの顔!?

トヴァルを語る上で欠かせないのが、七耀教会の守護騎士 << 第一位 >> アイン・セルナートとの関係だ。ふたりの出会いをもとに作られた小説が『カーネリア』との話もあるようだ。この『カーネリア』は、『閃』の作中でも文庫版として登場しているので、ぜひ読んでみよう。この小説にはミヒュトという人物も登場するが、そういえばトリスタの質屋の店主もミヒュトだったような……!?

遊撃士 トヴァル



帝国でギルド活動を行なう遊撃士。かつてはサラやヴェンツェル（現・クロスベル支部）らとともに活動を行なっていた。２年前のギルド襲撃事件をきっかけに帝国内のギルドは一時解散状態となったが、現在はひとりで帝国各地を巡回している。

■零の軌跡 プレストーリー ドラマCD

エステル　　おばさんA
ヨシュア　　おばさんB
トヴァル　　おばさんC
ティーリア　店員
カイ　　　　男A
指環の声　　男B
アイン　　　男C
受付ミシェル　女A
猟兵団A　　子供A
猟兵団B　　バス会社の人
遊撃士

零の軌跡 プレストーリー ー審判の指輪ー

エステルM「零の軌跡　プレストーリー　審判の指環」
エステルM「あたしとヨシュアは、遊撃士協会の依頼で、エレボニア帝国領内にいた」

○岩山

走るエステルとヨシュアの足音。

ヨシュア「気をつけて、エステル！　まだ近くにいるはずだ！」
エステル「わかってるわ、ヨシュア！」
崖の上にいる敵に気づくヨシュア。
ヨシュア「ハッ!?　エステル、崖の上！」
エステル「えっ!?」
猟兵団A「ハアッ！」
クナイを投げる音＆クナイが地面に刺さる音。
エステル「よっとっとっ！」
ヨシュア「今度は後ろだ！」
猟兵団A「グアアアッ！」
エステル、棒で猟兵団の剣を受け止める。
エステル「く……！」
猟兵団A「グアア……！」
剣を受け止めた相手の瞳を見るエステル。

エステルM「白い……瞳!?」
ヨシュア「はあっ！」
ヨシュア、剣で斬りつけるが、空振りに終わる。
ヨシュア「速い！」
猟兵団A「グアッ！」
何度か剣戟をかわすふたり。猟兵団A、いったん距離を取る。
猟兵団A「グアア……」
ヨシュア「来るよ、エステル！」
エステル「うん！」
トヴァル「(遠くから呼びかける) ふたりとも、待たせたな！」
エステル「あの声は！」
ピン！　と懐中時計をはじく音。
トヴァル「ゲイルランサー！」

風が吹き荒れる音。ドオォン！　と派手な爆発音。
トヴァル「……よし」
トヴァル、エステルたちの元へと駆けてくる。
エステル「トヴァルさん！」
トヴァル「油断するな！　こいつらかなり出来るぞ！」
エステル「あ、はい！」
ヨシュア「……いえ、もう襲ってはきません」
エステル「えっ？」
トヴァル「事切れてる……か」
ヨシュア「はい……」
トヴァル「こいつもか……今度は手加減したつもりだったんだがな」
エステル「…………」
トヴァル「こいつら、ジェスター猟兵団とは今まで何度かやりあったことがある」
ヨシュア「父さんと一緒に戦ったんですよね」
トヴァル「ああ。その時はカシウスさんと一緒だったからかもしれないが……正直、ここまで強いと感じたのは、今回の奴らが初めてだ。なんなんだこいつら？　異常なまでの戦闘力を見せたかと思えば、突然パッタリと事切れやがる。まるで……糸の切れた操り人形のように」
ヨシュア「…………」
トヴァル「ともかく、一度町に戻って……痛ッ！」
エステル「トヴァルさん！　腕から血が……」
トヴァル「あぁ……俺としたことが、ちぃと油断したぜ」
ヨシュア「早く戻って、手当てをしましょう」
エステルM「こうして私たちは、近くの町へ、傷の手当てと情報収集のために向かった」

○町・外観

田舎町。それほど人通りは多くない。
おばさんA「ジェスター猟兵団ですって!?」
おばさんB「それって少し前、帝国各地の遊撃士協会を壊滅させてまわってたっていう、あの？」
エステル「ええ、そうです」
おばさんB「どっ、どうしてそんな人たちが、この町の近くに!?」
おばさんC「いやだわ、物騒ねぇ……」
ヨシュア「驚かせてすみません。実は、最近周辺地域で行方不明者が相次いでいるんですが……」
おばさんB「ああ！　それなら知ってるわよ。力自慢の強い男性ばかり狙われてるってアレでしょ？」
おばさんC「この間、遊撃士までやられたって話よね」
おばさんA「なんでも犯人は、不思議な力で相手の自由を奪うんですって。……あら？　まさか犯人って」
ヨシュア「ええ。その一連の事件に、ジェスター猟兵団の残党が関わっているらしくて。僕たちは事件の調査と猟兵団を追って、この町にたどり着いたんです」
おばさんA「あら、そうだったの」
おばさんB「大変ねぇ、遊撃士さんたちも」
ヨシュア「ありがとうございます。ご婦人方にそう言っていただけると、僕たちも励みになります」
おばさんC「ご婦人方、ですって！」
おばさんA「あらやだ、若いのに素敵じゃない……」
エステル「(小声) うわ～、ヨシュアってばいい顔しちゃって……」
トヴァル「(小声) まったく、大した交渉術だな……」
ヨシュア「(咳払い)。それで、何か他に手がかりなどご

存じないでしょうか？」
おばさんA「といってもねぇ……あ」
おばさんB「もしかして昨日の……」
ヨシュア「昨日？」
おばさんA「実はね、この町の近くに今は使われていない古い砦があるんだけど」
おばさんB「そこに最近変な集団がたむろしてるのよ！ それが、その猟兵団だとしたら……」
ヨシュア「なるほど……その話、もっと詳しく聞きたいのですけど」
おばさんA「それなら、町長に聞くといいわ」
おばさんC「あまり、聞いて気分のいい話じゃないけどね」
ヨシュア「わかりました。ありがとうございます」
おばさんA「がんばってね、お若い遊撃士さん！」
おばさんB「応援してるわよ～」
おばさんたち、立ち去る。
トヴァル「ま、収穫アリってところだな。ようやくしっぽが見えてきた」
ヨシュア「ですね」
エステル「砦かぁ……いかにもって感じじゃない！ よーし、燃えてきたわ！」
ヨシュア「ノリノリだね……」
エステル「モチのロンよ！ それじゃ早速、町長さんのところに、いっくわ……」
どん！ とエステル、歩いてきた人にぶつかる。
荷物の、リンゴが落ちる音。
ティーリア「きゃ⁉」
エステル「うわわっ！」
エステル、すってーんと転ぶ。
エステル「ぶへっ！」
ヨシュア「エ、エステル……また、派手に転んだね」
エステル「あいつつ……」
ティーリア「えっ、あっ、ご、ごめんなさい！ 大丈夫ですか！ わたし、前がよく見えなくて……」
エステル「あ、ううん、こっちこそごめんね。あたしも全然周りを見てなかったわ。それだけ荷物を持ってるんだもの、こっちが気をつけなくちゃ

いけなかったのに……許してくれるかな？」
ティーリア「あ……はいっ」
エステル「えへへ……（小声でつぶやくように）あぁ、リンゴ落ちてる」
ティーリア「じゃあ、わたしこれで……」
エステル「うん、ほんとにごめんね！」
ティーリア「いえ。それじゃあ。（荷物を持ち直して）よっと」
立ち去るティーリアに声をかける。
エステル「あ、リンゴ忘れて（る）……」
ヨシュア「貸して、エステル」
エステル「あ」
立ち去るティーリアに声をかけるヨシュア。
ヨシュア「待って！」
ティーリア「はい？」
ヨシュア「さっきはお姉さんが悪いことしたね。おわびといっちゃなんだけど、その重そうな荷物、よかったら、僕たちに運ばせてくれないかな？」
ティーリア「え……でも」
ヨシュア「そうさせて欲しいんだ。お願い」
ティーリア「……はい」
エステル「おー！ ヨシュアったらジェントルマン！」
トヴァル「うむ。……というか、女性には年齢問わず優しいんだな、あいつは」
○ティーリアの家
エステルM「こうしてあたしたちは、その女の子の家に向かった」
ティーリア「それじゃ、包帯しばりますね。痛かったら、言ってください」
トヴァル「ああ、ありがとな」
エステル「ごめんねー、ケガの手当までしてもらっちゃって。あたし、こういうの苦手で……」
トヴァル「俺も、お前にやられるぐらいなら、自分で包帯を巻くしな」
エステル「むー！ じゃあ自分の傷ぐらい、アーツでちゃちゃっと治しちゃえばいいのに。あんなにすごいアーツが使えるんだし」
トヴァル「馬鹿言え、男の傷っていうのは、かわいい娘さんに治してもらって、はじめて癒えるものな

んだよ！　なー、ヨシュア？」

ヨシュア「なー、と言われても……」

エステル「迷惑な人だなー」

ティーリア「いいの、わたしもうれしいし。なんだか『聖女と白い狼』の娘さんみたい。それに、荷物まで運んでもらっちゃって。ありがとう、えーと……」

エステル「あたし、エステル！」

ヨシュア「はじめまして、ヨシュアと言います」

トヴァル「トヴァルだ。よろしくな」

ティーリア「エステルさんに、ヨシュアさんに、トヴァルさん……本当に、ありがとう」

エステル「気にしないで。あたしたち遊撃士だもの。人助けをするのは当然よ」

ティーリア「遊撃士⁉　知ってるわ！　世界の平和と安全を守る専門家でしょ？」

ヨシュア「そんな大げさなものじゃないけど」

ティーリア「ずっと裏社会で生きてたトビーが、カーネリアと出会ったのがきっかけで歩むことになった職業よ！」

エステル「へ？　トビー？　カーネリア？」

ティーリア、かなり舞い上がって。

ティーリア「素敵……！　『カーネリア』に出てくるような人が、目の前にいるなんて！」

エステル「(小声)な、なんだかわからないけど、凄いはしゃぎようね」

エステル「それで、あなたの名前も教えてくれる？」

ティーリア「あっ、ごめんなさい！　わたしの名前は、ティーリアって言うの」

エステル「ティーリア。いい名前ね！」

ティーリア「そうかな。『リ』が余計な気がするけど」

エステル「『リ』が余計……？」

ヨシュア「『人形の騎士』のティーア姫も素敵だけど、ティーリアもとってもかわいい名前だと思うよ」

ティーリア「あ、ありがとう……！　ヨシュアさん、『人形の騎士』を知ってるの？」

ヨシュア「うん、僕も本が大好きなんだ」

エステル「ほ、本？　それじゃ、今まで出てた謎の人名は……」

トヴァル「そういうことだ。(小声)しかし、よりにもよって『カーネリア』とはな……」

ティーリア「ヨシュアさんは、今何を読んでいるの？　私は、ショーン・アルナムの『マルクと深き森の魔女』！　いじわるなロンのせいで、マルクが森で迷っちゃって大変なの！」

ヨシュア「あーじゃあ、ここからが本番だね」

ティーリア「そうなんだ！」

ヨシュア「似たようなお話なら『3つの腕輪』もオススメだよ。ちょっと難しい言い回しもあるけど、本好きのティーリアなら読めると思う」

ティーリア「そのお話は知らなかったわ。覚えておかなきゃ！」

エステル「ねぇ、ティーリア。この大きな本棚にある本は、だいたい読んじゃったの？」

ティーリア「ううん、まだ半分も読めてないの。……わたし、ちょっと目が悪いから」

エステル「え……」

ヨシュア「最初にぶつかった時から不思議だったんだ。荷物が多いといっても、前が見えないほどじゃなかったしね」

エステル「あ……それじゃ、リンゴを落としても気づかなかったのは……」

ティーリア「…………」

トヴァル「さて……と。そろそろおいとましますか」

ティーリア「あ……はい」

エステル「ねぇ、ティーリア……ここに、ひとりぼっちで住んでるの？」

ティーリア「ううん、お兄ちゃんと一緒よ」

エステル「そ、そっか！」

ティーリア「うん。まだ昨日から、家に帰ってきてないけどね」

砦に連れ去られたのではないか、と緊迫した空気を出すエステルたち。

ヨシュア「えっ？」

トヴァル「おい……」

エステル「ま、まさか……ティーリアのお兄さんって……すごく、強い人？」

ティーリア「ううん、ただの技師見習いよ。残業はいつものことなの」

エステル「あ……そ、そうなんだ。ほーっ、よかった……」

ティーリア「何かあったの……？」

エステル「う、ううん、なんでもない！　気にしないで！　それじゃあね、ティーリア！」

ヨシュア「お邪魔しました」

トヴァル「傷の手当て、ありがとな」
ティーリア「はい。みなさんも、お気をつけて」

扉を開けて出て行くエステルたち。

○町中

店員「まいどありー！」
トヴァル「必要な買い物は、だいたい済んだな」
ヨシュア「はい。あとは、情報だけですね」
トヴァル「できれば今日中に町長から話を聞いて、明日には町を出たいところだな」
ヨシュア「そうですね。エステルも、それでいい？」
エステル「わかったわ！　出発は明日ね!?」
トヴァル「あ、あぁ……」
エステル「じゃ、あたし行くところあるから！　明日までには戻るから。じゃあねーっ！」

だーっと駆けていくエステル。

トヴァル「あっという間に見えなくなった……」
ヨシュア「エステルってば……」

○ティーリアの家

ドアをノックする音。

ティーリア「はい」

扉を開けるティーリア。

ティーリア「あ、エステルさん!?」
エステル「ティーリア、私を雇ってみない？」
ティーリア「え、ええっ!?」
エステル「雑事全般、力仕事まで何でもこなすわよ！　もちろん、話し相手も！」
ティーリア「え、で、でも……」
エステル「報酬は、あったか〜いおふとんひとつでどうかしら？　あ、ティーリアの手料理もつけば、もっとがんばって働いちゃうかも！」
ティーリア「エステルさん……」
エステル「……ダメかな？」
ティーリア「ううん、大歓迎！　お兄ちゃんに頼もうと思ってたこと、エステルさんにやってもらえると、すごく助かる！」
エステル「決まりね！　早速だけど、何をすればいい？」
ティーリア「ええっと……まず、あの灯りを取り替えて欲しいんだけど……」
エステル「オッケー！」

×　　×　　×

エステルM「そして、夜も更けて」
ティーリア「『旅人たちの宴』みたいな短編集も人気あるけど……わたしは『カーネリア』が一番好きかな。自分の国が舞台のお話だし。それに、一見冒険活劇に読めるけど、実は主人公トビーの淡く切ない初恋物語なのよ……あぁん、ステキ★」
エステル「へ、へー」
ティーリア「ヒロインのカーネリアがまたかっこいいの！　トビーが恋心を抱く理由もよくわかるわ。だって、彼を命がけで守るんだもの！」

ティーリア、小説の一節をそらんじる。芝居がかった口調で。

ティーリア「彼女の手が無造作に動き、長剣だけを残して、男は消し飛ぶ。剣のはずむ甲高い音と共に、シスターは膝をついた。『ごめんね、トビー』うつむいた彼女の頬を伝って、赤い血の筋がいくつも流れ落ちる。『あんたも、女神（エイドス）に呼ばれるかも知れないわ』」
ティーリア「う〜ん、かっこいい！　はぁ〜★」
エステル「（小声）はは……ティーリアって、かな〜り乙女チックなのね」
ティーリア「カーネリアには、モデルになったシスターがいるんだって。エレボニアに住んでるのかな……エステルさんは、それらしい人に会ったことある？」
エステル「さぁ……帝国に来たのは最近だしね」
ティーリア「そうなんだ」
エステル「あたしとヨシュアは、お隣のリベール王国の人間なのよ」
ティーリア「どうして帝国に？　あ、遊撃士のお仕事？」
エステル「うん、それもあるけど……実はねあたしたち、人を捜してるんだ」
ティーリア「人？」
エステル「ちょうど、ティーリアぐらいの年頃の、『レン』っていう女の子なの」

ティーリア「あの、その子って、もしかして何かの事件に巻き込まれて……」
エステル「あ！　違う違う、事件とかそーゆーんじゃないのよ!?」
ティーリア「よ、よかったぁ……いま、いっぱい怖いこと想像しちゃった」
エステル「レンは、事件に巻き込まれたわけじゃないわ。ただ……ちょっと、いろいろあってね。今はどこにいるのかもわかんないんだ。でもね、この事件を解決できたら、レンの行方がつかめるかもしれないのよ！」
ティーリア「そうなんだ！」
エステル「だからあたし、今回の仕事は、燃えに燃えてるの！　必ず成功させてみせるわよ！」
ティーリア「頑張ってね、エステルさん！」
エステル「ふふっ、ありがとう」
ティーリア「きっとそのレンちゃんも、エステルさんが来るのを待ってるわ！　だって、わたしもそうだもの。毎日お兄ちゃんが仕事から帰ってくるのを、ずーっと……待ってるもの」
エステル「ティーリア……」
ティーリア「お兄ちゃん、ずっとずっと働きづめなの。いっぱい働いて、わたしの目を、いいお医者様に見せるんだって。……とても、悲しい声で言うのよ。わたしは、カイお兄ちゃんがそばにいるだけで、幸せなんだけどな……」
エステル「……ティーリア、そっちに行っていい？」
ティーリア「え？　うん……」
エステル「えへへ～。ぎゅっ！」
エステル、ティーリアを抱きしめる。
ティーリア「わっ！　エ、エステルさん!?」
エステル「ん～、ティータの抱きごこちに勝るとも劣らないわ！」
ティーリア「ど、どうした急に……？」
エステル「いいのよ、ティーリア。今日はカイお兄ちゃんの代わりに、エステルお姉さんに思いっきり甘えなさい！」
ティーリア「エステルさん……はい」
エステル「ふふっ……」
ティーリア「くすくす……」

○町長の家

ヨシュア「こんな夜分遅くにすみません、町長さん」
町長「気になさるな。それに、拉致事件のことは、わしも気にかけておりましたからな。あの砦に巣くっている連中を怪しんではいましたが、まさか悪名高きジュスター猟兵団だったとは」
トヴァル「ええ、彼らが今回の事件の犯人と見て、間違いないかと。それで、何か情報をお持ちでないかと思いまして」
町長「あくまで噂じゃが……。奴らは何か、指環のようなものを持っているとか」
ヨシュア「指環……ですか」
町長「その力に支配された人間は、もはや助けるすべがないのだとも……君たちも十分気をつけるようにな……」
ヨシュア「ありがとうございます。それで、他には何か？」
町長「実は昨晩、町の工房が猟兵団に襲われて、残念なことにひとりの少年が……」
トヴァル「（つぶやくように）昨晩……それじゃ、今ごろはもう」
町長「頼む、あの猟兵団を……カイの仇をとってやってくれ」

○砦・内部

エステルM「翌朝。私たちは、ジュスター猟兵団が立てこもっているという砦へと向かった」
何人もの男たちが駆け抜ける足音。
猟兵団A「シャーッ！」
エステル「はあっ！」
どん！　と棒で猟兵団のひとりを突くエステル。
エステル「あんたたち、いい加減にしなさいよ！」
ヨシュア、猟兵団のひとりと剣を交えながら。
ヨシュア「ダメだエステル！　聞こえてない！」
トヴァル「（遠くから）避けろ、ふたりとも！」
エステル&ヨシュア「えっ？」
トヴァル「フレアアロー！」

トヴァルのアーツが炸裂する。どーん！ と火柱が上がる。

エステル「あ、あぶな～」

トヴァル「よーし、このまま一気に制圧するぞ！」

ヨシュア「っ!?」

猟兵団の男たち、ゆらりと立ち上がる。

猟兵団A&B「ウー……」

ヨシュア「あまり効いていないみたいですね」

トヴァル「もうちっとだけ出力を上げるか。……ん!?（遠くから呼びかける）エステル、そっちに新手のがいったぞ！」

遊撃士「ガアーッ！」

相手の連打を棒でいなすエステル。

エステル「はっ！ くっ！」

エステルM「この人、猟兵団とは服が違う。もしかして……」

エステル「やあっ！」

エステルの一撃を弾いて、距離を取る遊撃士。

遊撃士「フー……」

エステルM「でも……この人も、猟兵団と同じ瞳だわ。色のない目……」

トヴァル「（遠くから呼びかける）エステル！ そいつは猟兵団とは無関係の人間だ！ 猟兵たちもそうだが出来るだけ、命までは奪わないでやってくれ！」

エステル「今さらなに言ってるのよトヴァルさん！ そんなの、遊撃士として当然のことでしょーがっ！」

エステル、話しながら相手に打撃を繰り出す。バキッ！ とアックスが折れる音。

ヨシュア「上手い！ 武器を破壊した！」

エステル「さぁ、これで観念なさ……え？」

遊撃士「ウアァ……」

遊撃士、その場に崩れ落ちる。

猟兵団A&B「ウアァ……」

立て続けに、猟兵団の男たちも倒れる。

エステル「な、なんで……あたし、なにもしてないのに……」

ヨシュア「これは……」

トヴァル、駆け寄ってくる。

トヴァル「エステル、ヨシュア、無事か!?」

ヨシュア「はい……でも」

エステル、手で顔を覆いながら。

エステル「そんな……また！ どうして!? だってみんなさっきまで……！」

トヴァル「……くそっ！」

ヨシュア「エステル、ちょっとこっちに来て」

エステル「なによヨシュア、いったい……」

ヨシュア「ここ、肩当ての部分を見て」

エステル「えっ!? これって『支える籠手』の紋章じゃない！ それじゃ……遊撃士!? でも、どうして……」

ヨシュア「拉致されて……何か施されたんだと思う。催眠術か、投薬か、あるいはもっと、別の何か……」

トヴァル「『アーティファクト』」

エステル「え？」

ヨシュア「古代ゼムリア文明の時代に作られたと言われている謎の遺物だよ。古い遺跡からまれに出土することがあるんだけど、中にはまだ強力な力を持っているものがあるんだ」

エステル「それは知ってるけど……でも、どうしてそんなものが……」

ヨシュア「あれ？ もしかして……エステルにはまだ言ってなかったんですか？」

トヴァル「だってこいつに説明するの、めんどくさそーだったからな」

エステル「あ、あんですってー!?」

ヨシュア「まあまあ」

トヴァル「実はこの事件な、なんらかのアーティファクトが絡んでいるらしいんだ。けど……正直俺は半信半疑だったんだよ」

エステル「え?」
トヴァル「一応……一応信用できる奴からの情報ではあるんだが……だがなぁ……奴は……はぁ〜っ(ため息)」
ヨシュア「トヴァルさん?」
エステル「あ、あの……どしたの?」
トヴァル「……いや、なんでもない。これでようやく確信が持てた。催眠術や薬なんぞで、彼がやられるわけがないからな」
エステル「彼って……」
ヨシュア「この遊撃士、トヴァルさんのお知り合いだったんですね」
トヴァル「まぁ、な」
エステル「…………」
トヴァル「俺たちの本当の敵は、猟兵団なんかじゃない。人の自我を奪い、能力を引き上げ、そして死に至らしめる……そんな力を持ったアーティファクトだ。そしてその形状はおそらく……指環」
ヨシュア「ただ、僕もそうだと思って遺体を調べてみたんですが、誰の指にもそういった物は見つからなかったんです」
エステル「え……じゃあ違うんじゃない?」
ヨシュア「いや。アーティファクトの支配力は、指環をはずしてもなお持続する……と考えたほうがいいのかもしれない。一度指環に捕らわれたら最後。もう二度と正気には……」
トヴァル「町長もそんなこと言ってたな。俺たちも十分気をつけ(る)……」
ずしーん、ずしーん、と地鳴りのような音。
エステル「な、なに、この音?」
ヨシュア「気をつけて!」
煉瓦の壁をぶち破って、ゴーレムが出てくる。壁が崩れる派手な音。
トヴァル「うおっ!」
エステル「か、壁が、こなごなに……!」
ヨシュア「なんてデカいんだ……」
トヴァル「あいつに殴られたら、ひとたまりもないぞ……」
ゴーレムの緩慢な動き。うなり声(?)

エステル「まさかあれが……アーティファクト!!」
トヴァル、緊迫した雰囲気から一転、コミカルに。
トヴァル「指環だっつーの! おまえ人の話ぜんっぜん聞いてないだろ!!」
エステル「え、あ、そ、そうだったっけ!? あはは……」
ヨシュア「エステル……」
エステル「な、なによヨシュア!」
ヨシュア「まぁ、今はエステルのことは置いておくとして」
エステル「置いておかれた!」
ヨシュア「魔獣の一種……ですかね? あれ」
トヴァル「だろーな。ちゃっちゃとけちらして、先に進むぞ!」
トヴァル「エアストライク!」
圧縮された空気が、ゴーレムを襲う。ゴーレム、腕で防ぐ。
バシン! と打撃音。
トヴァル「腕で防いだ!? ただ図体がデカいだけじゃないってか」
ヨシュア「エステル、僕がおとりになって引きつけるから、そのスキに足元を攻撃して!」
エステル「わかった!」
ヨシュア、駆け出す足音。
ヨシュア「こっちだ! はあーっ!」
ヨシュア、刀で斬りつける音。ゴーレムの、ずしーん、ずしーんと動く音。
エステル「ナイス、ヨシュア! こっちもいくわよ……ふんっ!」
ぶん! と棒が空を切る音。
エステル「避けられた!?」
トヴァル「エステル、上だ!」
エステル「わあっ!」

ゴーレム、足でエステルを踏みつけようとする。エステル、かわす。

エステル「死角に入ったと思ったのに！」

トヴァル「なめてかかるなよ。こいつ、ただの魔獣じゃないかもしれん！」

エステル「どういうこと⁉」

トヴァル「この図体の魔獣にしては、動作が洗練されすぎてる。どこかに、操ってる奴がいる可能性が高い！　捜せ！」

エステル「っていっても、どこにいるのか……」

トヴァル「魔獣と俺たちの姿が見渡せて、かつ自分に危害が及ばないような位置だ！」

エステル「ということは、魔獣の後ろ、あのあたりに……えっ⁉　子供……？」

トヴァル「なんでがきんちょが、こんなところに……まさか！」

エステル「君、危ないよ！　こっちに来て！」

トヴァル「エステル、近づくな！」

ゴーレムのうなり声。どしーん、と足を踏みならす音。地面を揺らし、エステル、足を取られる。

エステル「きゃっ！」

ヨシュア「エステル！」

トヴァル「ヨシュア、見ろ！　あいつの指……！」

キィーン……と指環が共鳴するような音。

ヨシュア「指環……まさかあの少年が、町長が言ってた……」

トヴァル「かもな。工房の……カイ、だったか」

エステル「カイ⁉　それって……」

ティーリア「（回想）わたしは、カイお兄ちゃんがそばにいてくれたら……」

トヴァル「くそっ、あいつら！　あんながきんちょまで⁉」

ヨシュア「でも、魔獣の動きを止めるためには……」

トヴァル「やるしかないか……胸クソ悪ぃが、仕方ねぇ……！」

エステル「ちょっと待って！　ふたりとも、なにする気⁉　あの子は……カイは、ティーリアのお兄ちゃんなのよ！」

ヨシュア「えっ⁉」

トヴァル「なんだと⁉」

エステル、離れたところにいるカイに呼びかける。

エステル「ねえ、あなたカイでしょ⁉　こんなところで何やってるのよ⁉　ティーリアがあなたの帰りを待ってるわ！　戻りましょ、カイ！」

指環の共鳴音。

トヴァル「指環の力が発動してる……ヤバい！」

ヨシュア「エステル、ここにいたら危ない！」

エステル「カイ！　聞いてるの！」

ゴーレム、ずしーんと動き出す。動いた衝撃で、壁が崩壊する。

ヨシュア「エステル！」

エステル「ねえ、カイってば！」

トヴァル「ヨシュア！　いったん砦の外に出るぞ！　一発ぶちかまして、目くらましをする！」

ヨシュア「……はい。退くよ、エステル」

ヨシュア、エステルの手を強引に引っ張る。

エステル「え⁉　だ、だって、まだ、カイが……！」

トヴァル「フレアアロー！」

どかーんと派手な爆発音。たくさんの瓦礫が落ちる音。

○砦・外観

砦の入り口から出てくるエステルとヨシュアとトヴァル。かけだしてきて、肩で息をする。

トヴァル「はぁ、はぁ……」

ヨシュア「外まで来た。もう安心だ」

エステル「はぁ、はぁ……な、なんで？」

ヨシュア「魔獣の体内には、七曜石の欠片が入ってることがある。七曜石の扱いに長けた工房の技師なら、もしかしたら……」

エステル「そんなことを言ってるんじゃないわっ！　どうして砦から出てきちゃうのよ！　行くわよヨシュア、カイを連れ戻さなきゃ！」

ヨシュア「……それは出来ない」
エステル「どうしてよ！」
トヴァル「あのボウズの指にはまってた、ごっつい指環……多分あれが、ジェスター猟兵団が持ってるっていう、アーティファクトだ」
エステル「えっ……」
ヨシュア「人の自我を奪い、能力を引き上げ、そして……死に至らしめる」
トヴァル「だから、俺たちが手を出すまでもなく、時間が経てば……」
エステル「…………」
トヴァル「わざわざ、その瞬間を見にいくことはあるまいさ」
エステル「……ふたりとも、歯ぁくいしばれぇえ！」
ごちん、ごちん！　と思いっきり棒でふたりをぶったたくエステル。
トヴァル「いでっ！」
ヨシュア「いたたた……エ、エステル!?」
エステル「何言ってんのよふたりともっ！　時間が経てば、ですってぇ!?　だからこそ、それまでに助けなきゃいけないんじゃない！」
トヴァル「た、助けるってな、何か策はあるのかよ！」
エステル「そんなのわかんないわよっ！」
トヴァル「わかんないって、おまえな！」
エステル「（食い気味に）だけど、何かしなきゃ！　だって、あの子はまだ生きてるのよ！」
トヴァル&ヨシュア「（息を呑む）」
エステル「だめよ、ヨシュア！　トヴァルさん！　あきらめるのは、まだ早いんだからっ！」
ティーリアの足音。
ティーリア「エステルさん……？」
エステル「ティーリア!?」
エステル、ティーリアの元に駆け寄る。
エステル「ど、どーしてこんなところに……」
ティーリア「エステルさん……エステルさんっ！」
ティーリア、感極まってエステルに抱きつく。受け止めるエステル。

ティーリア「お兄ちゃんが、お兄ちゃんが……！」
エステル「っ！」
ティーリア「町長さんがね……お兄ちゃんが、砦にって……。もう、手遅れかもって……！　わたし、わたし……！　うわあぁぁっ！」
エステル「大丈夫……っ！　大丈夫よ、ティーリア……！」
ティーリア、ぐずりながら。
ティーリア「……エステルさん、お、お願いがあるの……」
エステル「なに？」
ティーリア「わたしの目じゃ……見てもたぶん、わからないと思うから……」
エステル「え？」
ティーリア「猟兵団に捕まった人はね、もう助からないって町長さんが言うの……。みんな目が……瞳が色を失ってしまうんだって……」
エステル「……！」
ティーリア「だからせめて、教えてください……カイお兄ちゃんの瞳の色は、何色だったかを！」
エステル「……わかったわ、ティーリア。あなたは……ひとりで町に戻れる？」
ティーリア「いやっ！　エステルさんまでそんなこと言うの!?　だって、わたしはまだ！　お兄ちゃんが……！」
エステル、満面の笑みを浮かべて。
エステル「うん。わかってるわ」
ティーリア「え……」
エステル「だけどね、ティーリアを砦には連れて行けないの。中には怖い猟兵や魔獣がたくさんいるからね。だから、ティーリアはここで待ってて。あたしがカイお兄ちゃんを連れ戻してくるから！」
ティーリア「エステルさん……」
エステル「こういうことは、遊撃士に任せてちょうだい！　ね？　ティーリア！」
ティーリア「……はい、お願いします！」

○砦・内部

エステルたち、歩きながら会話。

エステル「指環にやられてしまった人は、瞳から色が消えてしまうそうなの！　ティーリアの言ったことは本当よ！　これまでに戦ってきた猟兵や、あの遊撃士さんも、みんな怖いくらいに真っ白な瞳をしていたわ。でもあの子……カイの瞳には、まだわずかに色が残ってた気がするの！　きっとまだ、完全には捕らわれてはいないのよ！　だからカイの指から指環を外すことが出来れば！」

トヴァル「あまり希望的観測はしない方が良いと思うがな……。それに、ボウズの前には魔獣がいる。あの壁はどうやって崩すつもりだ？」

エステル「トヴァルさん、できるだけ派手なアーツを連続して撃てる!?　魔獣自体は倒せなくてもいいの。カイにたどり着けるように、魔獣の足止めをしてもらいたいの！」

トヴァル「むちゃくちゃ言うなぁ……。ひとつのアーツを駆動させるのに、どんだけ時間がかかるかわかってんのか？」

エステル「む……難しいかしら？」

トヴァル「難しい！　はっきり言って、無茶な注文だ！」

エステル「………」

トヴァル「俺以外のアーツ使いならな！」

エステル「トヴァルさん」

ヨシュア「僕が回り込んで、カイから指環をはずしてみるよ。エステルは、トヴァルさんと一緒に、スキを作ってくれるかい？」

エステル「えっ？」

ヨシュア「こういうことは、僕の方が向いてるだろうしね」

エステル「ヨシュア……。ふたりとも、ありがとう！」

トヴァル「いーから前に集中しろ！」

ヨシュア「来たよ、エステル！」

ずーん、ずーんとゴーレムが歩く足音。

トヴァル「よし……ボウズもいるな」

エステル「カイ……必ず助けるからね！」

ヨシュア「じゃあバックアップ頼みます！」

ヨシュア、ダッシュで駆け出す。

エステル「気をつけてね、ヨシュア」

トヴァル「それじゃ行くぞ！　ストーンハンマー！」

岩石が崩れて、それがゴーレムめがけて飛んで行く。

びゅん！　という岩石が飛ぶ音と、その岩石がゴーレムに当たる音。

指環が共鳴する音。

トヴァル「力を使わせるか！　エアロストーム！」

ごおおおと風が吹き抜ける音。

トヴァル「ボルカニックレイブ！」

爆発音。

トヴァル「プラズマウェイブ！」

ピカッ！　と雷撃が落ちる音。

エステル「カイ！　どう、くやしかったらかかってらっしゃい！」

指環が共鳴する音。

エステルM「手を伸ばした！」

エステル「今よ、ヨシュア！」

ヨシュア「はあああっ！」

ヨシュア、カイに飛びかかり、その手を取る。

ヨシュア「取った！」

共鳴していた指環の音が止まる。

エステル「やったぁ！」

トヴァル「待て、足元が！」

カイの足元の地面にヒビが入り、崩れる。

トヴァル「落ちる！」

ヨシュア「しまった！」

エステル「カイ！」

トヴァル　「間に合え！　はっ！」

トヴァルが空気のクッションを作り、カイを受け止める。

トヴァル　「アーツでクッションを作った！　いまのうちにカイを！」

エステル　「ありがとう、トヴァルさん！」

エステル駆け寄り、カイを抱きかかえる。

エステル　「カイ！　カイ!!　平気!?」

ヨシュア、高いところから呼びかける。

ヨシュア　「指環は外した！　とにかく彼を安全なところに運んで！」

エステル　「わかったわ！」

エステル、カイを抱えて駆け出す。

ヨシュア　「ふぅ……とりあえずひと安心か。僕も合流しない……と……」

指環が共鳴する音。

ヨシュア　「……しまっ……！」

指環が共鳴する音、大きく。

○砦・出口近く

トヴァル　「エステル、ここに寝かせろ」

エステル、カイを横に寝かせる。

エステル　「カイ！　しっかりして！　目を覚まして、カイ！　お願いよ……！」

カイ　「う、うぅ……」

エステル　「カイ……!?」

カイ　「……え？　あの……誰、ですか……？」

エステル　「……やったー！」

カイ　「え、あの……」

エステル　「あたしはエステル！　ティーリアに頼まれて、あなたを助けに来たのよ！」

カイ　「ティーリア……妹に!?」

トヴァル　「カイ、これまでのこと、説明できるか？」

カイ　「え？」

トヴァル　「あの指環……一体どういう物なんだ？」

カイ　「指環……。あの夜、工房でひとり残業をしていたら、知らない人がやってきて、ぼくに指環を……。指環がはめられた瞬間、ぼくの頭の中で、誰かの声が聞こえました。汝が罪を裁く……己の業を見つめろと……」

トヴァル　「（ため息）」

カイ　「何度も……何度も……見たくなかった光景が浮かんでは消え……少しずつ目の前が黒く染まって……。だけど、それは……ぼくが心の奥に隠してきた罪を具現化したものに他ならなくて……。ぼくはただ闇の中で、指環の審判が下るのを待って……」

エステル　「や、やめて！　なんなのよ、なにを言ってるの!?　あなたみたいな子供が何の罪を犯したって言うのよ!?」

カイ　「いいえ……ぼくは……ぼくは裁かれるべき人間なんです。ぼくのせいで、ティーリアは……。ぼくが、もっとしっかりしていれば……！」

トヴァル　「よーし、ありがとな。もういい、十分だ」

カイ　「う……うぅ……！」

トヴァル　「もう……全部忘れちまっていいからな……」

息を殺して泣くカイ。

トヴァル　「人の心の傷をえぐる『審判の指環』か。……なんて悪趣味なアーティファクトだよ」

エステル　「…………。あれ？　そういえば、ヨシュアは？」

○ヨシュアの心象風景

どこまでも続く、まっくらな闇の中、というイメージ。

ヨシュア　「(独白) ここは、どこだ……？　なにも見えない。真っ暗だ……」

指環の声　「赦されざる罪人よ。汝が業を見つめよ」

ブシャッ！　と剣で人を突き刺す音。

男A　「ぐあっ！」

男がバタリと倒れる音。

男A「し……漆黒の、牙……！」
ヨシュア「！」
指環の声「汝が罪、此処に裁く」
男B「ひいいっ！」
女A「いやーっ！」
男C「やめろ、殺さないでくれぇ！」
子供A「うわーーん！」

次々と斬りつける音。

男B「ぐああっ！」
女A「が……はっ！」
男C「……死にたく、ない……！」
子供A「ママ……ママ……」

人々のうめき声が幾重にも重なる。

ヨシュア「違う……僕がやったんじゃない……」
指環の声「審判は下った」
ヨシュア「違う！ 僕は……！」
エステル「ヨシュア……痛い……痛いよ……！」
ヨシュア「ッ!? エス……テル？」
エステル「……ヨシュ……ア……」
ヨシュア「違う……僕はやってない……！ エステルを……そんな……！」
指環の声「汝を有罪に」
ヨシュア「僕は……！」
指環の声「汝を有罪に」
ヨシュア「……ボク、ハ……」

凛と響くエステルの声。

エステル「自分のやったことは、自分が一番わかってる！」
ヨシュア「っ！」
エステル「だからこそ死ぬほど苦しんで！ 傷ついて！ それでも頑張って、生きようとしてるんじゃない！」
ヨシュア「エステル……」
エステル「指環なんかに、とやかく言われる筋合いなんてないわ！ そうでしょ……ヨシュア！」
ヨシュア「……そうだね、エステル」

指環の声「汝を有罪に」
ヨシュア「そう、僕は有罪だ。……でも、僕の罪は、僕自身が背負い、償うもの。おまえに裁かれるものじゃない！」

バキッ、パキパキッとヒビが入り、砕ける音（ガラス的なものをイメージ）

○砦・内部

エステル「気がついた？」
ヨシュア「エステル……」
エステル「（明るく）もう！ なにやってんのよ、ヨシュア！」
ヨシュア「うん。ありがとう、エステル」

ずーん、ずーんとゴーレムが動く音。

エステル「いっけない！ 魔獣まで目を覚ましちゃったわ！ 急ぎましょ、ヨシュア！」
ヨシュア「あ、あれ？」
エステル「どうしたのよ!?」
ヨシュア「ゆ、指環が、どこかに……」
エステル「ええっ!? って、あぁ、なんだここに落ちてるじゃない。よっと」

エステル、指環を拾い上げる。

ヨシュア「だめだエステル、指環に触れちゃ！」

指環が共鳴する音。エステル、指環に乗っ取られたか!? という演技。

ヨシュア「エステル！」
エステル「これが……事件のすべての元凶。『審判の指環』」
ヨシュア「（息を呑む）」

ここで一転、いつものエステルに。

エステル「よしっ！ これで万事オッケーね！」
ヨシュア「へ？」
エステル「行くわよ、ヨシュア！」
ヨシュア「ちょ、待って、エステル！ それは危険だ、

今すぐ指環を手放して！」

エステル「え⁉ でも、こんな危ないもの、ここに放ってはおけないわよ！」

ゴーレムのずしーんという足音、近くに。

ヨシュア「うわっ！」

エステル「ほら！ ぐずぐずしてる場合じゃないわ！」

トヴァルとカイ、やってくる。

トヴァル「エステル、ヨシュアー！」

エステル「トヴァルさん、カイ！ ここは危ないわ、砦の外に出るわよ！」

ヨシュア「エ、エステル……だから」

エステル「トヴァルさん、少しの間、魔獣を足止めして！
　カイと指環は、あたしが責任持って避難させるわ！」

トヴァル「おう！ ……って、おまえ！ そんなもの素手で持って大丈夫なのか⁉」

エステル「モチのロンよ！ 指環なんかに負けて、たまるもんですか！」

トヴァル「いや……指環なんかって、それ一応、アーティファクトなんだけど……」

エステル「とにかく、足止めよろしく！ カイ、行くわよ！」

カイ「は、はい！」

エステルとカイ、脱出する。

○砦・外観

カイ「はぁ、はぁ、はぁ……」

エステル「外まで出ちゃえば、もう安心よ」

エステル、離れたところで待つティーリアに向かって。

エステル「おーい、ティーリア！」

ティーリア「エステルさん！ あ……」

カイ「ティーリア！」

ティーリア「カイ……お兄ちゃん！」

カイとティーリア、お互いに駆けだし、抱き合う。

カイ「ティーリア！」

ティーリア「お兄ちゃん……お兄ちゃぁん！」

カイ「ごめんな、心配かけて……」

ティーリア「いいの……お兄ちゃんが無事なら、それで……！」

エステル「（涙ぐんで）よかった……ホント、よかったね、ティーリア」

× × ×

砦の出入り口から、ヨシュアとトヴァルが出てくる。

トヴァル「やれやれと。ようやくこれで終わりだな」

ヨシュア「はい」

トヴァル「手にした人間の罪の意識を刺激して、幻覚を見せるアーティファクトか……」

ヨシュア「猟兵たちは、その力を利用しようとして逆に取り込まれた……」

トヴァル「かもな。犠牲者が連鎖したのは、指環自体に、人を操って次の審判の対象者を選ぶようなシステムが組まれてた……ってところかな」

トヴァル、あきれたトーンで。

トヴァル「……で、なんでエステルは平気なんだ？ あの能天気娘にゃ過去のトラウマなんてありませーんってことなのかい？」

ヨシュア「まさか。もちろんエステルにも、後悔の念を抱くような辛い過去がたくさんありましたよ。でも、彼女は……そんな心の傷さえも、明日に進む希望に変えてしまうことが出来るんです」

トヴァル「（小声で）恥ずかしげもなくのろけやがって……」

ヨシュア「え？」

トヴァル「つまり、俺の言った通りってことだな。男の傷を癒してくれるのは、いつだってかわいい娘さんなんだよ」

ヨシュア「（笑顔で）そうみたいですね」

トヴァル「……何か腹が立ってきた」

ヨシュア「な、なんでですか⁉」

トヴァル「くそーいいなー。あー、俺も彼女欲しい！」

× × ×

カイ「ごめんな、ティーリア……本当にごめんよ……」

ティーリア「お兄ちゃん……？」

カイ「ぼくが……もっと大人で、もっと力があったら……。おまえの目を治してやれるかもしれないのに……」

ティーリア「や、やだなぁお兄ちゃん。わたしは平気よ？」

カイ「だけど、このままじゃ、大好きな本だって読めなくなっちゃうんだぞ？」

ティーリア「平気！　もしそうなっても……お兄ちゃんが読んでくれるでしょ？」

カイ「ティーリア……。（ちょっと涙ぐんで）あぁ、もちろんだよ！」

ティーリア「やった！」

エステルM「そうだ……カイは無事戻ってきたけど、ティーリアの目は……」

アイン、いきなり後ろから声をかける。

アイン「事件を解決する手助けをしたんだ。それなりの報奨金が出るだろう」

エステル「えっ!?」

アイン「最高位の医者に診せられるだけの金額を、ふんだくってやるといい」

エステル「あなたは……？」

アイン「見てのとおり、ただの可憐なシスターだ」

すぱー、とタバコをふかすアイン。

エステル「か、可憐な……？（小声で）ていうかタバコくさい」

ヨシュアとトヴァル、歩いてくる。

ヨシュア「エステル、どうしたの？」

トヴァル「なんだなんだ……って、げえっ！」

アイン「あん？」

トヴァル「……な、なんでもありません」

エステル「あ、あの、シスターがどうしてこんなところに？」

アイン「このような場所に幼子ひとりでは物騒だろう？」

エステル「幼子……あ、ティーリア！」

アイン「そういうことだ」

エステル「そ、そっか。ありがとう、シスター」

アイン「礼には及ばんよ。私は君に用があるのだからな」

エステル「え？」

アイン「フフ……」

カイ「……あの、エステルさん。ぼくたちはこれで」

エステル「あ、うん！」

カイ「さ、行こう、ティーリア」

ティーリア「あのっ……本当にいろいろありがとう、エステルさん！　ヨシュアさん！　トヴァルさんも！」

エステル「ティーリアもカイも、元気でね！」

ヨシュア「帰り道も気をつけて」

エステル「ほら、トヴァルさんも何か言ってあげてよ」

トヴァル「ん～……待ちな、お嬢ちゃん」

ティーリア「え？」

トヴァル「ちょいちょい、あのよ」

アイン「なんだ？」

トヴァル「（耳打ち）ごにょごにょごにょ……」

アイン「なんだと？」

トヴァル、パン、と手を合わせて。

トヴァル「ひとつ頼む！」

アイン「はぁ……ま、別に構わんが」

エステル「あの……トヴァルさん、なにしてるの？」

トヴァル「ま、こんな機会めったにないだろうしな」

エステル「へ？」

トヴァル「いいかお嬢ちゃん、今からこのお姉さんが言うセリフ、よーく覚えて置くんだぞ」

ティーリア「え……」

アイン「では行くぞ。『ごめんね、トビー。あんたも、女神（エイドス）に呼ばれるかも知れないわ』」

ティーリア「あ……『カーネリア』のセリフ！」

エステル「でも、なんでわざわざ、このシスターに言ってもらったの？　……って、トヴァルさん、トヴァルさん！」

トヴァル「ん？　あぁ、終わったか？」

ヨシュア「なんで、耳塞いでるんですか……？」

トヴァル「いろいろあるんだよ、いろいろ！　お嬢ちゃん、どうだ、覚えたか？」

ティーリア「う、うん」

トヴァル「そっか！　よかった！」

ティーリア「……？」

カイ「えっと……それじゃ、改めて。みなさん、失

礼します」

ティーリア「さようなら！」

エステル「じゃーねー！」

ヨシュア「さようなら！」

トヴァル「気ぃつけて帰れよー！」

カイとティーリアが歩き去る足音。

アイン「……で、話を続けていいのか？」

トヴァル「ああ、すまなかった」

アイン「いいさ。本題に移ろう。君たちの持っているそのアーティファクト、それをこちらに渡してもらおうか」

エステル「えっ!? ど、どうして……」

ヨシュア「僕たちが持っていることを知っているんですか？」

アイン「それはまだ生きているな。気配で分かる。力を持ったアーティファクトは七曜教会が管理する決まりなのは、君たちも知っているな？ ならば、シスターの私が受け取ることに、何ら異論はあるまい？」

ヨシュア「あなたは……ただのシスターではありませんね。一体何者なんですか!?」

トヴァル「（脱力して）彼女の名前はシスター・アイン。れっきとした七曜教会の人間で……今回の俺たちの依頼主だよ」

エステル「え!?」

トヴァル「いいから言うとおりにしとけ。ガラは悪いが、信用出来る人物だ。……一応な」

アイン「一応は余計だぞ。このアーツを撃つしか脳がないへっぽこ遊撃士が」

トヴァル「へっぽ……！」

エステル「どういうこと……なの？」

ヨシュア「さぁ……。ただ、トヴァルさんが言うからには、信用していい相手だと思う」

アイン「では、この小箱の中に、指環を」

エステル「はい……」

エステル、小箱の中に指環を置く。小箱の蓋が不思議な力で自動的に閉まる。

アイン「確かに受け取った。難題、よく解決してくれた」

トヴァル「いや……死者が多数出てる。それと、猟兵の残党がまだ砦に残ってるかもしれんが……」

アイン「心得た。あとはこちらで処理をしておこう」

トヴァル「すまん。今回は猟兵も被害者みたいなもんだ。手厚く葬ってやってくれ」

アイン「エイドスに誓って」

トヴァル「さて、と。せっかく依頼主が目の前にいることだしな。エステル、ヨシュア！」

エステル「ええ」

ヨシュア「シスター・アイン。これで依頼は終了しました。約束です、僕たちに、あなたが持っている情報を教えてください」

アイン、タバコに火をつけて一服する。

アイン「レンについて……だな。いいだろう、よく聞くがいい」

エステル「………」

アイン「レンは、リベールでの事件以来、結社には戻っていない」

アイン、一服し、煙を吐き出す。

ヨシュア「……え？ 終わり!?」

アイン「ああ」

エステル「ええっ!? あれだけ苦労して、それだけ!?」

アイン「ああ。１００%保証付きの重要情報だ」

トヴァル「あ、あんた……相変わらずえげつないな」

エステル「そんな～！」

ヨシュア「なんというか、脱力感が……」

トヴァル「あーあ、かわいそうに……」

アイン「フフ……。私からもひとつ、問わせて欲しい。君たちはレンを見つけてどうするつもりだ？」

エステル「え？」

アイン「『殲滅天使』レン。結社『身喰らう蛇』の執行者。”あれ“は、その異名のとおり、おびただしい数の命を殲滅させてきた、血塗られた娘だ。まだ幼い子供故に純粋で、それだけに他の執行者よりたちが悪いとも言える。そんな悪魔のような天使を捜しだして……君たちは一体、どうするつもりなんだ？」

エステル「あたしたちは、レンを家族に迎えようと思ってるの！」

アイン「……か、家族？」

ヨシュア「そうなんです」

ドラマCD

零の軌跡 プレストーリー ―審判の指輪―

エステル「なのにレンったら、かくれんぼが大好きで……ほんと手が焼ける子なの。でも……そうよね、結社に戻ってないって分かっただけでも大収穫だわ！ 貴重な情報をありがとう、シスター・アイン」

ヨシュア「また一から仕切り直しだね」

エステル「いいじゃない、望むところよ！」

アイン「くくっ！ なんだ？ まだレン捜しを続けるつもりなのか？」

エステル「当然よ！ こうなったら帝国中を、とことん捜し回ってやるんだから！」

アイン「はははっ！ これは愉快だ！」

ヨシュア「シスター……？」

アイン「だったら帝国ではなく、クロスベル自治州に行ってみるがいい！」

エステル「クロスベル自治州……？ そこにレンがいるの!?」

アイン「ああ。だが、まだ外部に出してはならない、未確認情報だ。だから悪いが、99．9％の保証しかできないぞ？」

エステル「……ヨシュア！」

ヨシュア「次の目的地は決まったね」

エステル「トヴァルさん！ あたしたち行くわ！」

トヴァル「行くって、どこへ……」

エステル「クロスベルに決まってるじゃない！ あたし、今すぐ向かってみる！」

トヴァル「はあ!?」

アイン「はっはっはっ！」

ヨシュア「す、すぐはダメだよ！ 遊撃士協会への報告もあるし……」

エステル「だって！ やっとレンの居場所がつかめたのよ！ 何ヶ月もかかって……あたしもう、じっとしてられないわよ！」

トヴァル「やれやれ……いいさ、行ってきな。あとは俺が片づけといてやるよ」

エステル「トヴァルさん！」

トヴァル「その代わり、全部終わったら、連絡ぐらいくれよな？」

エステル「うん！ ありがとう、トヴァルさん！」

ヨシュア「長い間、本当にお世話になりました！」

エステル「シスターもありがとう！ さよならーっ！ さ、行くわよヨシュア！」

ヨシュア「待ってよ、エステル！」

エステルとヨシュア、駆け足で立ち去る。

トヴァル「じゃーなー……はは、あわただしい奴らだ」

アイン「……くくくっ。聞いたか？ 執行者を家族に……だと！ 部下から聞いていたが、実に興味深いな。まさかこの私が面食らうような答えを返してくるとは」

トヴァル「だからって、直々に会いに来るこたぁないだろ。星杯騎士団守護騎士第一位、アイン・セルナート総長さんよ！」

アイン「……フフ」

トヴァル「それに言っとくけどな、あいつらはきっとやってのけるよ。不可能を可能にする奇跡を起こす。それが遊撃士ってもんなのさ」

アイン「ほう？ ずいぶんとらしいことを言うようになったじゃないか」

トヴァル「そりゃどーも。まだまだへっぽこですけどね。そういうシスターは相変わらずのご様子で」

アイン「ふふ……」

アイン、タバコに火をつけ、一服する。

※『カーネリア』は、アインがモデルになったキャラクターが登場する小説で、『トビー』とは、その『カーネリア』の中に出てくる主人公（トヴァルがモデルとなった）です。

トヴァル「いや……そうでもないか。どうしたよ。泣く子も黙る『カーネリア』にしちゃあ、珍しく親切じゃないか」

アイン「なーに、ただの気まぐれだよ。『トビー』」

トヴァル「いいかげん、その呼び方はやめてくれ……」

アイン「はははっ！ それにしても、『審判の指環』か。新たな旅立ちを見送るには、おあつらえ向きのアーティファクトじゃないか。これまでの、そしてこれからの彼らが描く軌跡には、どういった審判がくだされるのだろうな――」

○クロスベル自治州・遊撃士協会

エステルM「クロスベル自治州についた私たちは、遊撃士協会へと顔を出した」

エステル「ごめんくださいー！」

ミシェル　「（階上からの声）こっちよ、上がってきて！」

エステル　「あっ、2階？」

ヨシュア　「お邪魔します」

階段を上がるふたり。

エステル　「こんにちは〜、ミシェルさん」

ミシェル　「ハァイ☆」

ヨシュア　「お久しぶりです」

ミシェル　「ほんと、アナタたちがウチに来てくれるなんてねぇ。これで当分、クロスベル支部は安泰だわ☆」

エステル　「あはは……買いかぶりすぎだと思いますけど」

ヨシュア　「ご期待に沿えるよう、頑張ります」

エステル　「改めまして、正遊撃士、エステル・ブライト」

ヨシュア　「ならびにヨシュア・ブライト」

エステル　「遊撃士協会・クロスベル支部に、正式に所属させていただきます」

ヨシュア　「どうぞよろしくお願いします」

ミシェル　「いらっしゃ〜い☆　歓迎するわ」

ヨシュア　「アリオスさんにもご挨拶をと思ったんですけど……お仕事ですか？」

ミシェル　「お察しの通り、今も出張中」

エステル　「もう、アリオスさんってば。あんまりお仕事ばかりだと、シズクちゃんがさびしがるわ。お父さんに思いっきり甘えたい年頃のはずなのに」

ヨシュア　「（たしなめるように）エステル」

ミシェル　「いいのよ〜、本当のことなんだから」

ヨシュア　「（小声で）この二人が揃うと、勝てる気がしない……」

ミシェル＆エステル「ねー！」

エステル　「何か言った、ヨシュア？」

ヨシュア　「いや、なんでも。けど、アリオスさんが忙しいのは仕方ないじゃないですか。S級遊撃士でもおかしくないほどの腕前なんですから」

ミシェル　「総本部からも、しつこく昇進の話が来てるぐらいだしねぇ。ま、分かる話だけど。向こうとしては、カシウス・ブライトの代わりを揃えておきたいところでしょうし」

ヨシュア　「父さんの弟弟子、という点も、総本部としては高く評価するところでしょうし」

エステル　「えっ、そうなの!?　知らなかった……」

ヨシュア　「それに実績でも、父さんに引けを取らないしね」

ミシェル　「レミフェリア公国での一件ね。本人は『本当の意味で解決できたわけではない』とか言ってるけど、謙遜しすぎよ〜。現に、勲章もいただいてるんだし」

エステル　「勲章!?　アリオスさん、そんなものまでもらっていたの!?」

ミシェル　「しかも、大公閣下直々によ」

エステル　「はぁ……改めてすごい人ねぇ」

ヨシュア　「クロスベルにその人ありと言われた《風の剣聖》アリオス・マクレイン。遊撃士の間での評価も高いしね」

ミシェル　「最近じゃ、『クロスベルの真の守護者』なんて二つ名までもらってたわ。本人、いやそ〜な顔してたけど」

エステル　「あははっ！　確かに、アリオスさんなら嫌がりそう」

ミシェル　「でも、彼におんぶにだっこ、というわけにはいかないわ」

エステル　「もちろん！　あたしたちも、バリバリ働くわよ〜！」

ミシェル　「うんうん、その調子☆　あ、忘れるところだったわ！　アリオスから、手紙を預かってたのよ」

ミシェル、エステルに手紙を差し出す。受け取るエステル。

エステル　「アリオスさんから？　何だろう……」

手紙を開けるエステル。

エステル　「なになに……『こんな形での挨拶ですまない。エステル、ヨシュア、ふたりのクロスベル支部就任を、心より歓迎する』もう、相変わらず真面目な人ね」

ヨシュア　「『おまえたちは、十分ベテランだ。あとのことは任せる。好きなようにやってみるといい』アリオスさんにそんなこと言われると、なんだかくすぐったいね」

エステル　「『追伸。時間が出来たらでいい、シズクに会いに行ってやってくれ。きっと喜ぶと思う』言われなくても、そのつもりだったわ」

手紙をたたむエステル。

ミシェル　「アリオスからも期待されてるんだから、ふたりとも、がんばってちょうだいね☆」

エステル&ヨシュア「はい！」

ミシェル「それで、今日はこれからどうするの？」

ヨシュア「街を歩いてこようと思います。買い物とかもありますし」

○クロスベル・市街地

大都会の喧噪。車も行き交う。クラクションの音。

エステル「はー、いつ見ても、クロスベルってすごいところね……。これだけ街が発展してると、色々便利そう」

ヨシュア「そうだね。……まぁ、その分、色々問題もあるけどね」

エステル「問題？」

ヨシュア「このクロスベルは、エレボニア帝国とアルバード共和国のちょうど間に位置してるから、何かとね」

エステル「ふーん」

ヨシュア「まぁ、それはいずれ分かると思うよ。さぁ、僕たちはこれからどうしようか？」

エステル「決まってるじゃない！ 遊撃士協会の仕事をしながら、レンの行方を捜すのよ！ そのためには、まず自治州を一通り歩いて……」

人々が集まって騒いでいる声。

ヨシュア「なんだろう？ あの人だかり」

エステル「行ってみましょう、ヨシュア！」

エステルとヨシュア、人だかりに向かう。

エステル「あの、何かあったんですか？」

バス会社の人「おかしいんですよ。バスの到着が遅れてて。通信機も繋がらないし、なにかトラブルがあったんじゃないかって……」

エステル「あたしたち、遊撃士なの。何か力になれるかしら？」

バス会社の人「ほんとかい？ じゃあこの先の様子を見てきてもらえないかな？」

エステル「わかったわ」

バス会社の人「よかったよ、遊撃士に頼めて。さっき警察の特務支援課の人も様子を見にいってくれたんだけど。でも警察はやっぱり……ねぇ？」

エステル「はぁ……」

ヨシュア「とにかく、僕たちが行ってみます。行こう、エステル」

エステル「ええ」

エステルとヨシュア、歩き出す。

○ウルスラ間道

市街地から離れて、まわりには草原が広がっている。

エステル「うーん、なかなか見当たらないわね。もうすっかり市街地から遠ざかっちゃってるし」

ヨシュア「しかも、ここまで歩いてきたのに、対向車とすれ違わなかったのも気になる。急いだ方がいいかもしれない」

エステル「あ！ あのバスじゃない？」

ギャーッ！ という魔獣の鳴き声。

エステル「な、なに、今の声!?」

ヨシュア「この鳴き声は、まさか……」

ギャーッ！ という魔獣の鳴き声。

エステル「大変！ 魔獣に襲われてるんだわ！」

ヨシュア「エステル、あそこを見て！」

エリィの銃声、ロイドのトンファーの打撃音、ランディが槍で突く音、ティオの魔道杖の音。

エステル「誰かが戦ってる……!?」

ヨシュア「さっき聞いた警察の人かな。だったら、僕たちが手を出すのは、よけいなお世話かも……」

エステル「でもヨシュア、危険な目にあいそうな人たちを黙って見てるなんて、できる!?」

ヨシュア「君なら、そういうと思ったよ」

エステル「ふふっ」

ふたり、武器を構えて。

エステル「いくわよ、ヨシュア！」

ヨシュア「うん、エステル！」

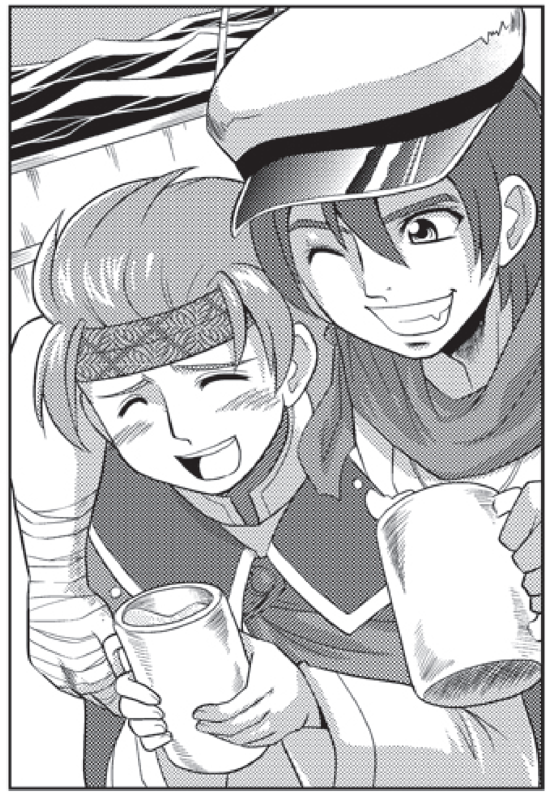
終わり



英雄伝説 零の軌跡
FB ファルコムBOOKS
午後の紅茶にお砂糖を
著者:むらさきゆきや
イラスト:窪茶
こんな『零の軌跡』もアリ!?
日本ファルコムの大ヒットＲＰＧ『零の軌跡』・『碧の軌跡』の主人公【特務支援課】の日常は意外とまったり!? 本編とは一味違った彼らのゆる～い毎日を描いて『月刊Falcommagazine』で大人気を博したノベライズがついに単行本で登場！
12月6日発売!!
価格:1,155円(税込)
ISBN:978-4-89610-255-0
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行:フィールドワイ
発売:メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp



FB ファルコムBOOKS
英雄伝説 零の軌跡
四つの運命
著者:田沢大典 イラスト:松竜
特務支援課はここから始まった!!
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
日本ファルコムの大ヒットＲＰＧ『英雄伝説 零の軌跡』から、ロイドたち特務支援課の過去エピソードを描いたオフィシャルノベライズ。ゲーム本編では語られなかった名シーンの裏側やキャラクターそれぞれの心情が今、明らかになる！
原作:日本ファルコム
(『英雄伝説 空の軌跡』)
価格:1,155円(税込)
ISBN:978-489610-215-4
全国書店にて大好評発売中!!
発行:フィールドワイ
発売:メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp



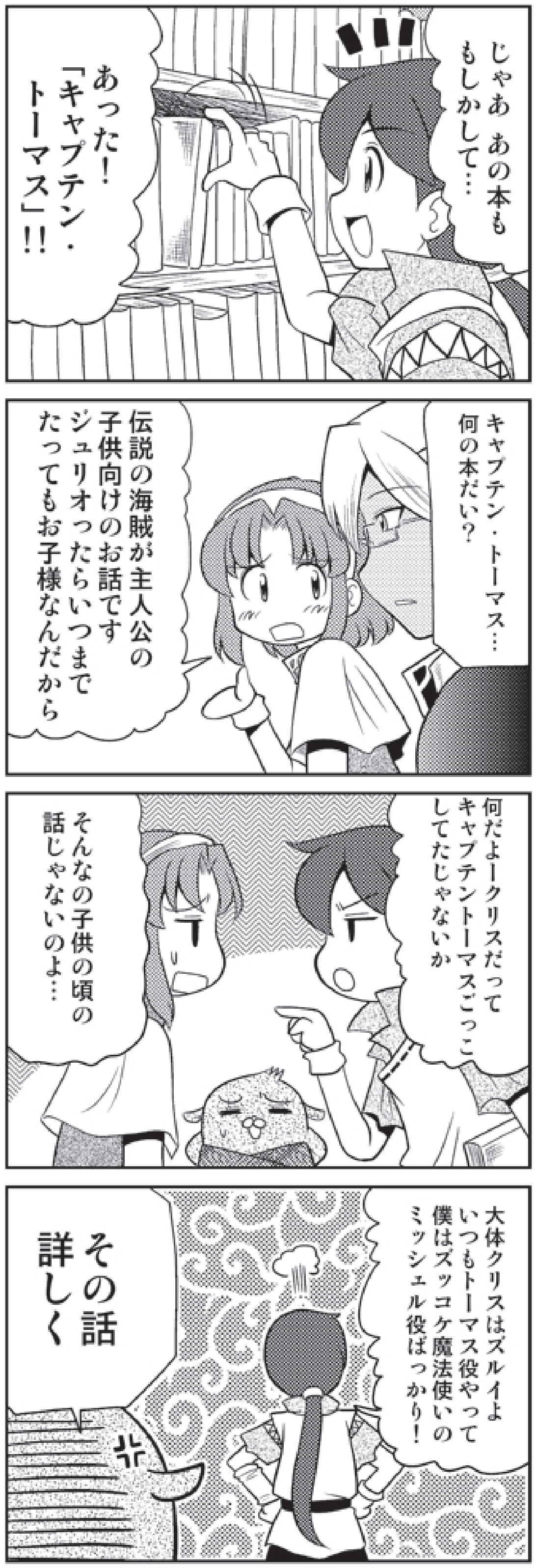
みんな集まれ！ファルコム学園

新久保だいすけ

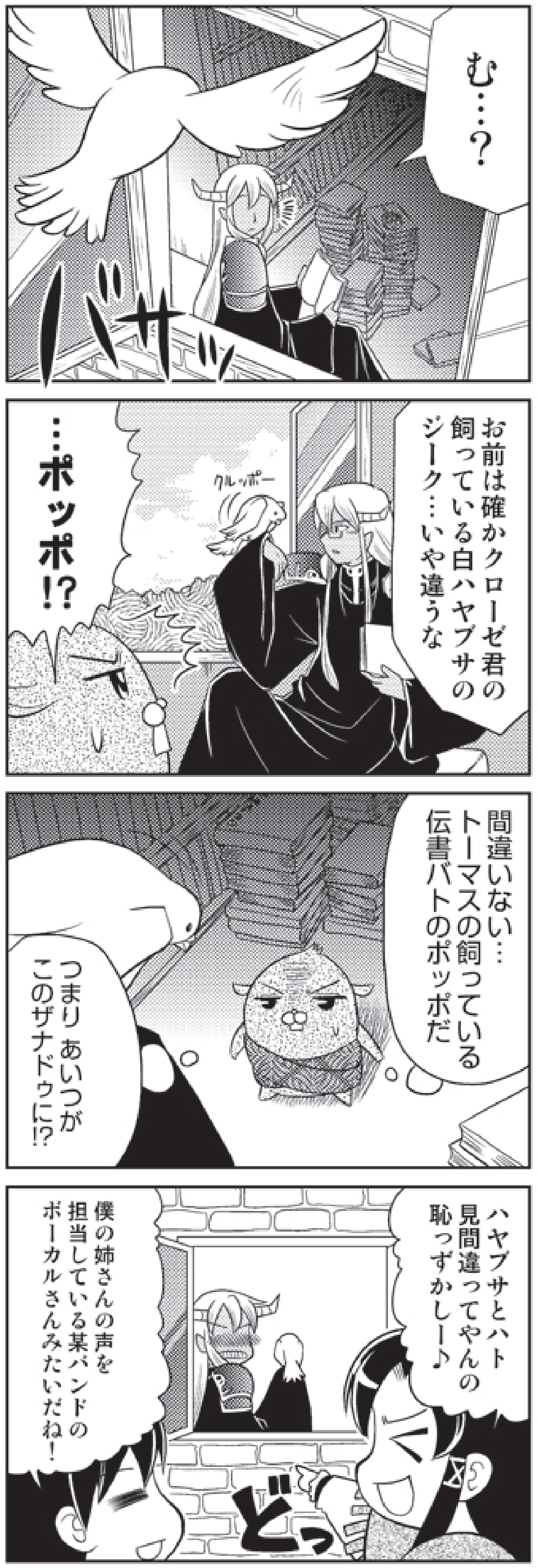
うろおぼえ



歪曲される英雄



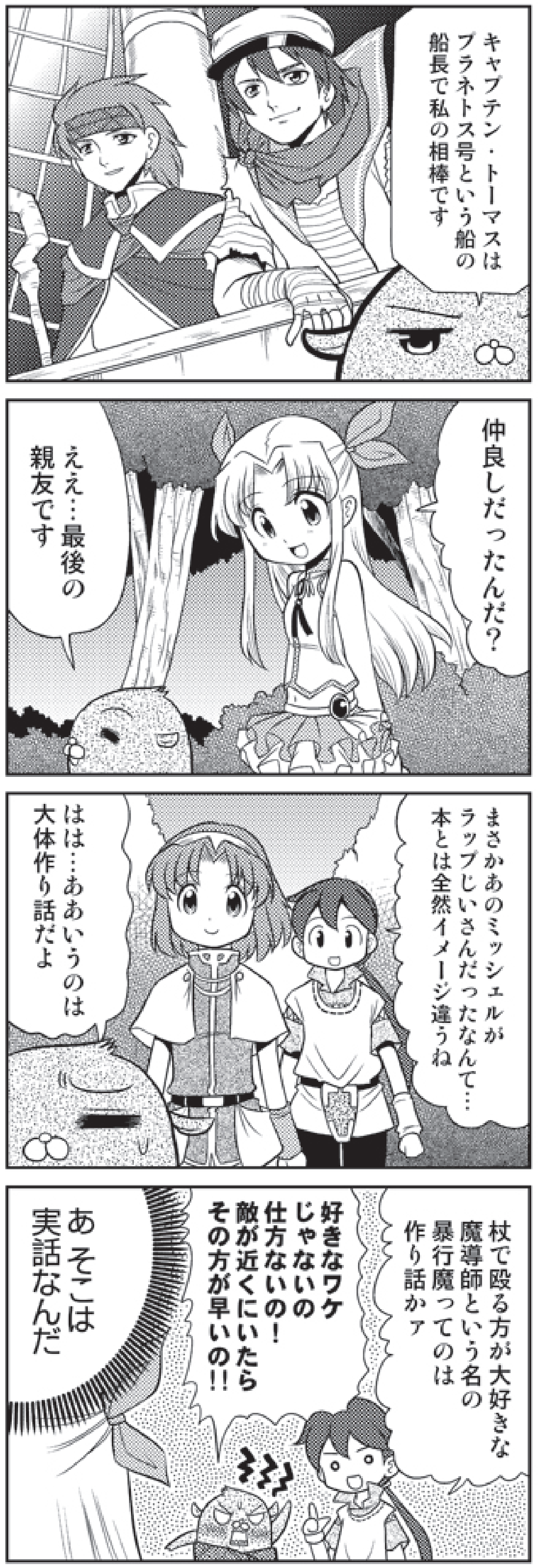
某カルさんとハト



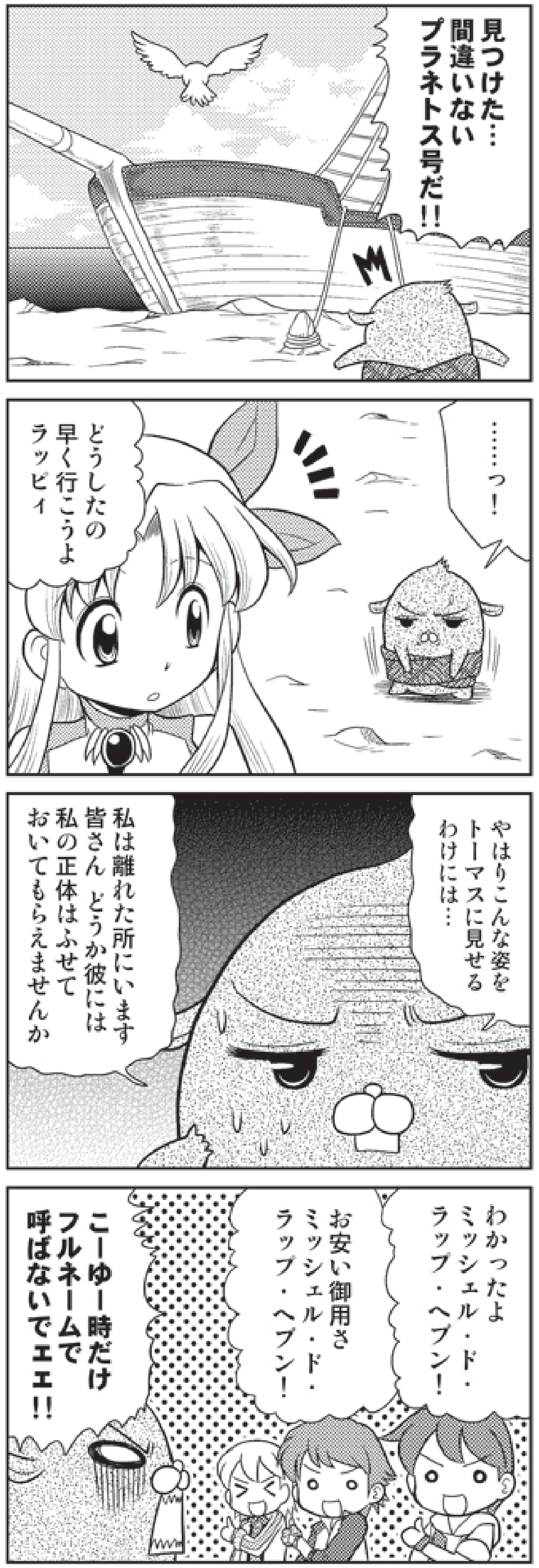
ナンパ



ミッシェルの主張



再会の前に



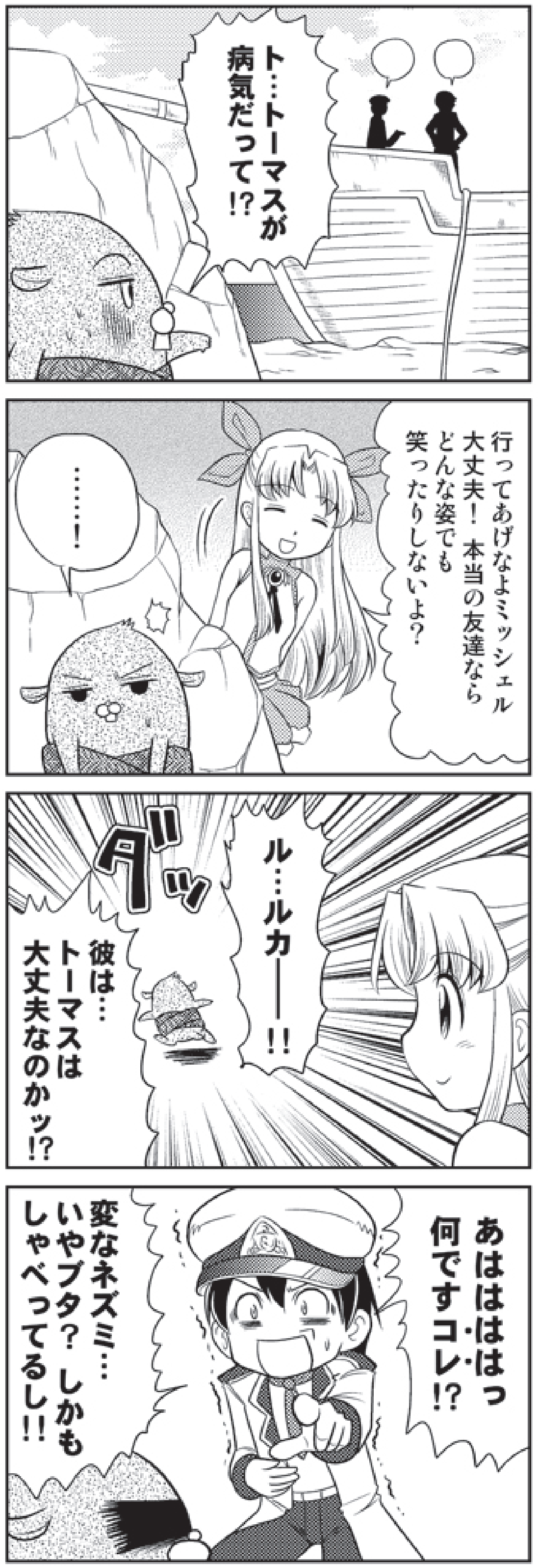
難破の原因



キャプテンの存在理由



本当の友達



本当の友達2



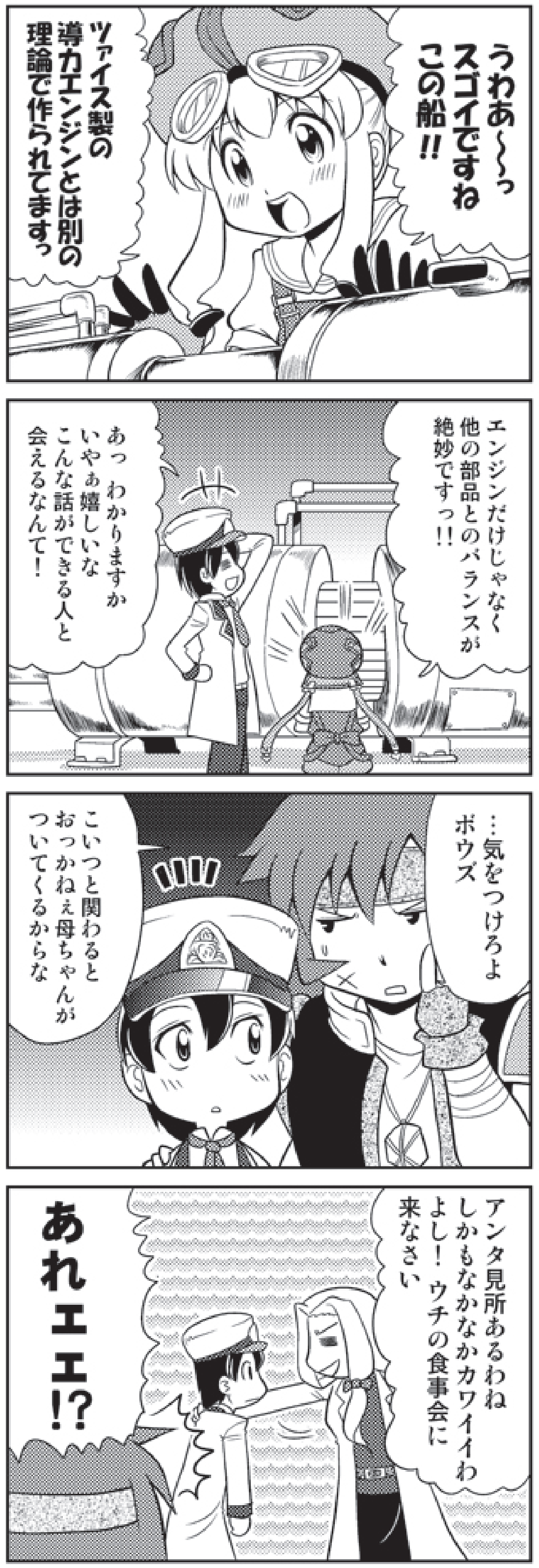
暴走と反転



いいところ



温度差



変装名人



フロード（トーマスの変装）

期待のオズマ




FB ファルコムBOOKS
空の軌跡外伝
レーヴェ物語
作画：楽時たらひ 脚本：田沢大典
もうひとつの
『空の軌跡』が始まる――
原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）
価格：893円（税込）
ISBN:978-489610-224-6
『英雄伝説 空の軌跡』の人気キャラクター・《剣帝》レオンハルトの過去を描くアウターストーリーのコミカライズ。彼はいかにして《身喰らう蛇》に与みし、数奇な運命を辿ったのか。レオンハルトの目線から見たもうひとつの『空の軌跡』の物語が始まる！
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
全国書店にて大好評発売中!!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp


FB ファルコムBOOKS
目指せ！ファルコム一番星!!
開校御礼！
何がどうしてこうなった!?『月刊Falcommagazine』でお馴染み、日本ファルコムの歴代人気キャラクターたちが繰り広げるドタバタ四コマコミックが満を辞して登場。新久保だいすけが描くトンデモな学園生活がスタート！
俺たちの学園生活が単行本化だと…？
本当ならレンも一冊欲しいわ
全国書店で大好評発売中よ!!
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
みんな集まれ！
ファルコム学園①
著者：新久保だいすけ
価格：893円（税込）
ISBN:978-489610-245-1
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp

Falcom FanArt Collection

数々の名作で多くのファンを生み出してきた日本ファルコム。
FFCでは、そんなファルコムを愛するイラストレーターの方々のイラストとコメントを毎月お届けします!

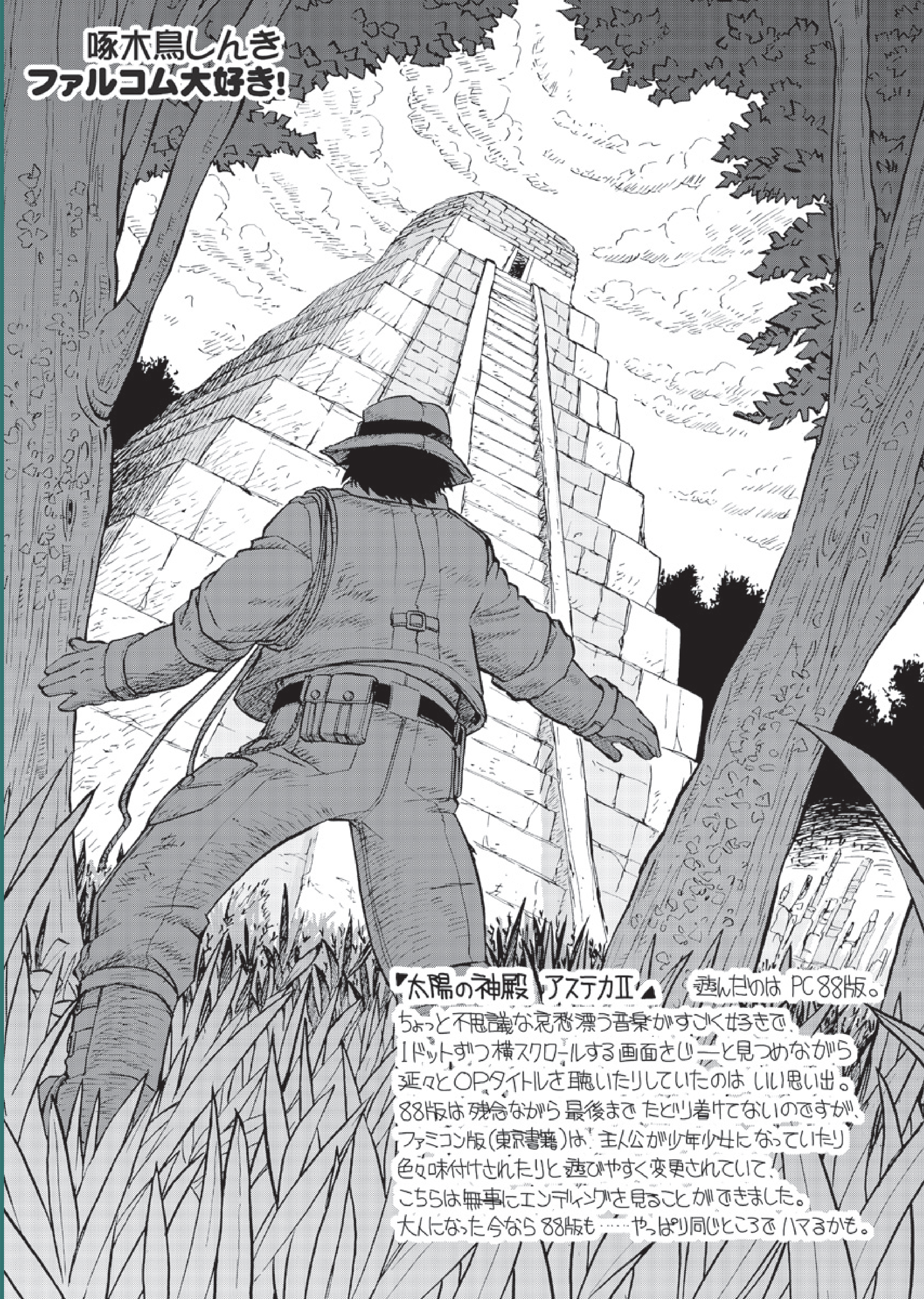


安藤一次冷却水

来年は軌跡シリーズ10周年という記念の年ですね。公式はもちろん、ファンの皆様の活動・記念のイベントなどもありそうで今から2014年が楽しみです！

『英雄伝説 零の軌跡』(2010)

2012年に『零の軌跡 Evolution』として生まれ変わった「軌跡」シリーズ第２作目である今作。フルボイスで会話するキャラクター達や総リファインしたビジュアルなど、新たな魅力が満載だ。



コテ放題

コテカナことjdkBANDボーカル小寺可南子がゲームと共に、好き放題な日々のことを描くコラム!!

▶PROFILE

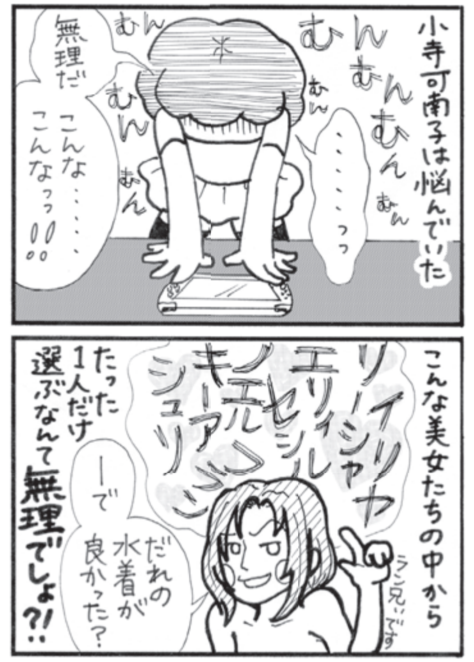


日本ファルコムのゲームソングを奏でる専属バンド"jdkBAND"のボーカル。webラジオ「ファルコムラジオ"めんどくさいです…でもがんばります"」では声優水橋かおりさんと共にパーソナリティをつとめる。その他CMソング、ジングルなど活動は多岐に渡る。
twitter @cana_ko_tera

第10回　ようやくギアチェンジ？

まいどドウモみなさまコテカナです！　秋ですね。秋といえば読者に食欲にスポーツに、みなさまいかがお過ごしでしょうか。私は台風にウンザリしつつ、色々と予定が飛んだおかげでゲームがはかどりました。台風といえば、小さい頃は台風がくると胸騒ぎがして、住んでたマンションのエントランスから荒れ狂う外の景色を見つつ縄跳びをしてました。必ず下駄をはいて。一体どういう心理状態だったんでしょうね。今はおとなしくお家の中でゲームして過ごしてるだなんて、自分自身の成長をしみじみ感じる秋でございます。

さてさて碧、今回は2章を終えてのインターミッションについて熱く語りたいところ！　ミシュラムワンダーランドで水着美女たちとワッショイワッショイ！のはずなんだけど、通商会議のその後が気になりすぎて……美女たちの水着が上の空ぁぁぁ～！　福眼しながらもストーリーの続きが気になるこの葛藤うおぉぉぉ～!!（鬼編：珍しくマトモ（？）なこと言ってる……）







2011年10月から好評配信中のWEBラジオ『ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります』の舞台裏をこっそりお届け♪

ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります
■配信日　毎週金曜日、公式HP、ランティスラジオ、ニコニコ動画にて更新。
■メインパーソナリティ　水橋かおり（『碧の軌跡』ティオ・プラトー役）　小寺可南子（『ファルコムjdkバンド』ボーカル）
■公式ホームページ　http://www.falcom-radio.com/

第102回-第104回　白石涼子（『閃の軌跡』エリオット・クレイグ役）

102-104回のゲストは『閃の軌跡』でエリオット・クレイグを演じられている白石涼子さん。主人公・リィンたちが所属するⅦ組から、初めてのゲスト参戦となった。『閃』の発売から間もなくの放送ということもあり、収録時の様子や、白石さんがエリオットに対して抱いた感想などが語られた。「出発！特務しれん課」のコーナーは久しぶりにお料理回に。月見団子を作ったガチくんとしおりんだったが、ブランクがあったせいか無難な出来で、安心しつつもどこか残念そうな（？）、水橋さんと小寺さんの姿があった。

▶第102回-第104回の舞台裏◀

『閃』の発売を受け、主要キャストが続々とゲストとなり、一番の気を使うのがネタバレ対策。水橋さんや小寺さんもまだクリアはしていないので、今後もクリアしたリスナーさんにはもどかしいお話が出てくるかもしれませんが、ご容赦ください！とのことだ。

第105回　岡島俊治（ファルコムjdkバンド）　上倉紀行（ファルコムjdkバンド）

105回は月に1回の恒例コーナーになった「ガディス岡島のファルコムクロニクル」の放送回。しかし今回は、9月に幕張メッセで行なわれた「東京ゲームショウ2013」の会場で収録されたスペシャル回となった。期待の最新作『閃の軌跡』ではなく、あえて『白き魔女』をチョイスし、ファルコムの近藤社長をゲストに、ひたすら濃い「ガガーブ愛」が存分に語られた。近藤社長も『白き魔女』を愛してやまないということで、トークはどんどんとヒートアップ。生徒であるガチくんとしおりんがタジタジになる一幕も。

▶第105回の舞台裏◀

今回は、幕張メッセでの収録となったが、当初ファルコムが単独で出展することが初めてということもあり、閉場後に会場が使えるかどうかが分からず、一時は「ホテルで録る？」「別日にする？」という案も出ていたが、無事会場を使えるということが分かり、収録できたのだ。



今月のコテガキ

毎週更新とともに発表される、小寺さん直筆の「コテガキ」を少しだけご紹介！

人生半キャラずらし



jdkバンドのドラマー・オカジがファルコムと音楽と人生について熱く語ります！

「Exhilarating Ride～碧の軌跡 オリジナル・サウンドトラック」

東京ゲームショー、jdkBAND大阪ライブと、先月はひたすら外に出っぱなしだったのだが、今月は打って変わってひたすら引き篭もり状態が続いている。何故なら、仕事がまったく無くって……なわけでは無く、来年発売予定の「英雄伝説 碧の軌跡 Evolution（碧えぼ）」に使われるアレンジ楽曲の締め切りが近づいて来ているからだ。前回の「零の軌跡Evolution」ではドラマーとしてのみの参加だったが、今回はアレンジャーとしても参加させて頂いているのである。ありがたや。

今回も、全曲にアレンジを施し、碧の軌跡の世界をさらに拡げていこうというコンセプトなのだが、しかし、なんにせよ膨大な楽曲の数である。毎日ガンガン進めたとしても、そう簡単にゴールは見えてこない。先月からこのプロジェクトに着手してはいるものの、なかなかタイトなスケジュールだ。

だが、僕はここでひとつ、大きな壁にぶち当たった。

何故か、なかなか作業が捗らないのである。編曲のイメージがなかなか湧いて来ないのだ。本来、これらの楽曲達が、ゲームの中でどういう風に聴こえるのが理想的なのか、まったく掴めていない自分に気が付いてしまったのだ。

その原因は……何を隠そう、「僕が、碧の軌跡を未プレイである」……という由々しき事態である。

正直、時間的猶予はまったく無いと言っていい。だが、本当にこのまま仕事を進めてしまって良いのだろうか。……いや、良いワケが無い。イメージも無く、ただただ作業をこなして行くだけでは、良い結果なんて出るわけがない。

そんな中途半端なアレンジをする位ならば、素晴らしい原曲達をそのまま使った方が遥かに良いだろう。何より、手に取ってくれたプレイヤーの皆様に対して失礼だ。

自称「ファルオタ」を語っている僕のアレンジがそんな事では、僕をこのプロジェクトに誘ってくれた関係者の方々への信頼を裏切る事になってしまう。確かに、僕が詳しいのはファルコムの昔の作品なのは間違いないが、それはただの言い訳だ。……それじゃ駄目だ。駄目なのだっ！



そう思い立ってから、ひたすら「碧の軌跡」をプレイし続けている。まだ残念ながらクリアには至っていないが、しかしどうだろう。アレンジ作業が捗ること捗ること……！　急がば回れとは良く言ったものである。

「なるほど、この楽曲はここで使われるのか。それならばこのパートをバイオリンの生演奏にしてみて……」とか、「あ、この曲ってこんなシーンでも流れるのなら、もうちょっとここをこうやってみて……」とか、ゲームをプレイし始めてからと言うもの、湯水のようにアイデアが湧いてくるではないかっ！

このアレンジならばきっと、碧えぼを手に取ってくれたお客様達も楽しんでくれるだろう！　そして……碧の軌跡、めっちゃくちゃ面白いじゃん!!　うあー！　オリビエ出てきた!!　クローゼェェ!!

ええっ!?　ノエルとエリィってユリア様のファンなんだ!?　ちょっ！　水着!!　……ヤバイよ、アレンジする時間が無くなっちゃうけど、先が気になってついついプレイしちゃうよ!!　あれ、なんで空が白んでいるんだ……？　え、もう5時!?

……かくして、僕の制作意欲に満ちた日々は始まったのであった。

さて、そんなわけで、今回このコラムでご紹介したい楽曲は、「碧の軌跡 オリジナル・サウンドトラック」から「Exhilarating Ride」。保養地ミシュラムでの楽しくも優雅な一時を演出する、オシャレなスムースジャズ/アシッドジャズ楽曲だ。今回の碧Ｅｖｏでは僕が担当しており、豪華な生演奏バージョンとしてお届けする予定だ。お楽しみに！

「しかし本当にこの仕事、締め切りに間に合うんだろうか…？」と、ゲームをプレイしながら、若干心配している事実は、関係者には言わないでおくとしよう、そうしよう。…それではまた次回お会いしましょう！



岡島俊治（Okaji）

1979年6月9日生まれ
ドラマー/パーカッショニスト/作曲、編曲家/プロデューサー
洗足学園短期大学器楽科打楽器専攻卒業。
2000年、ロックバンド『HeadPhonesPresident』のドラマーとしてデビュー。
2005年、同バンド脱退後はフリーミュージシャンとしての活動を開始。様々なアーティストのサポート、レコーディング、プロデュース等を行う。
2008年より『ファルコムjdkバンド』に参加。
主な共演歴：jdk BAND、Sixh.Opera、HeavensDust、野宮真貴、植村花菜、CORE OF SOUL、DENIAL、安藤禎央、清田愛未、中村幸代、一純悠人、momokomotion、越尾さくら…etc

「英雄伝説 碧の軌跡 オリジナルサウンドトラック」

ゲーム本編で使用された最新曲に加え、ボーナストラックとしてファルコムjdkバンドボーカル・小寺可南子が熱唱する主題歌「碧い軌跡」のフルバージョンも完全収録！
全58曲、CD2枚組でお届けするオリジナルサウンドトラック！
■価格：　3,129円(税込)／ＤＬ版：　2,400円(税込)
■収録曲：全58曲
■商品ページ
(ファルコムオンラインショップ)
http://www.falcom.co.jp/mailorder/catalog/m064.html
■DL販売サイト：iTunes、AmazonMP3、mora

≪Falcom jdkバンドライブ特設サイトURL≫
http://www.falcom.co.jp/jdk/index.html

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！





『英雄伝説 閃の軌跡』攻略本

充実の情報をこれ１冊で!

『英雄伝説 閃の軌跡』の攻略本が２冊同時に発売予定。詳細なゲームシステムの解説から２周目以降のやりこみ要素まで、どちらもこれ１冊でばっちりサポートしてくれる。付録にはリィン達のコスチュームチェンジができるオリジナルプロダクトコードの他、「ザ・コンプリートガイド」には描き下ろし４コマを収録した特別小冊子が付くなどファンにはたまらない仕様となっている。

英雄伝説 閃の軌跡
公式パーフェクトガイド
発売予定日：2013年11月８日
価格：1785円（税込）
ISBN：978-4-04-729310-6
発行：株式会社KADOKAWA
編集：エンターブレイン

日本ファルコム公式
英雄伝説 閃の軌跡
ザ・コンプリートガイド
発売：2013年11月８日
価格：1785円（税込）
ISBN：978-4-04-866047-1
発行：株式会社KADOKAWA
編集：アスキー・メディアワークス

英雄伝説 閃の軌跡 オリジナルサウンドトラック

エレボニア帝国を音楽で旅しよう!

リィンたちⅦ組メンバーの冒険を彩る音楽を余すところなく収録したサウンドトラックがついに登場。劇中使用曲として、ファルコムjdkバンドボーカル・小寺可南子が歌う主題歌『明日への鼓動』、エンディグテーマ『I miss you』を含む、全87曲をＣＤ４枚に一挙収録した超豪華仕様となっている。４枚組み、４時間超の『閃』の世界を楽しもう。また、※同日、iTunes(R)Store・AmazonMP3・moraでもダウンロード販売を開始。12月13日発売。4095円（税込）。ダウンロード版は3000円(税込)。



『閃の軌跡』EDテーマ配信開始

冒険の余韻を感じよう!

『英雄伝説 閃の軌跡』より、ファルコムjdkバンドボーカル小寺可南子が歌うエンディングテーマ曲『I missyou』が音楽配信サイトiTunes(R)Store・AmazonMP3・moraで配信スタート！　プレイヤーに入れてどこでもリィン達の冒険の余韻を楽しむことができるぞ。また、現在日本ファルコムはiTunes(R)Storeにて4000曲以上の楽曲を配信中。11月８日より配信。150円（税込）。





PS3版『英雄伝説 閃の軌跡』無料体験!

お試し学園生活開始!

2013年９月26日に発売して以来、ファンを魅了してきた日本ファルコム最新作『英雄伝説 閃の軌跡』。なんと現在、期間限定でPlayStation(R)Plus会員向けにPS3トライアル版を無料配信中だ。ゲーム起動時から180分間、『閃の軌跡』を無料でプレイすることが可能となっており、セーブデータは製品版にも引き継げる。PlayStation(R)Plusで配信中。11月19日まで。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.33

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 大場恵美子
デザイン・DTP	さとうだいち
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（ビーニーズ）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/
制作・販売協力	シナノ印刷株式会社

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！

今月のプレゼントはこちら!!





① 各１名様

❶『英雄伝説 閃の軌跡』サイン色紙
●リィン&エリゼ&ブルブラン　●マキアス&ユーシス

『閃』発売記念のプレゼント企画に敗者復活のチャンスが到来！　２種類のパターンからお気に入りの組み合わせを選んで応募しよう！

② １名様

❷ティオのファルコムラジオ
特製コースター

大好評配信中『ティオのファルコムラジオ』のキュートなロゴ入りコースターはここでしか手に入らないスペシャルプレゼント！

めんどくさいです…けどラジオもよろしくです



プレゼントの応募方法

こちらのアンケートの回答を下記のアドレスまでメールにてお送りください。
プレゼントの当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

宛先：
件名：vol.33プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）
2：面白い→
　つまらない→
3：①
　②
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

【記事一覧】

アンケート

①ファルコムのゲーム音楽の楽譜集が発売されたら購入を検討しますか？
②日本ファルコムのゲーム作品で1番好きな作品は何ですか？

●アンケートの２番は記事一覧から１つずつ今月号の面白かった・つまらなかった記事を選んでご記入ください。３番は「はい・いいえ」「作品名」でお答えください。

宛先はこちら➡ falmaga@field-y.co.jp　応募締め切り 11月25日

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、賞品の発送のためのみに利用し、その他の目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後３ヶ月を越えて保有することはありません。